夏の日記

　夏のような暑さを記録した今年の春の長期休暇中、自堕落大学生活二年目の俺は、久々に実家へ里帰りした。

　今更ながら、家族に見つかるとまずいものは残していないだろうかと、自分の部屋を漁っていると、五冊セットとかでは売ってなさそうな少しシャレた黄緑色のノートが出てきた。開くと乾いたほこりっぽいにおいがして、先の丸い濃い鉛筆で書かれた字が黒々と散らばっていた。思わず親指の裏を確認したくらいすごい筆圧だ。しかし、この微妙に丸っこくて荒っぽい字体は今と大して変わらない。そういえば、小学校の長期休暇に、担任から「チェックはしないが日記をつけろ」という自主性を重んじた宿題を出されたことがあった。しかし、一体いつのことだったか。

　パラパラとページをめくっていると、一文、影のように、鉛筆で真っ黒に塗りつぶされた箇所が目にとまった。元書いてあった文字は全く読めない程に強く濃く塗られている。それなのに、書いた文、書いてすぐに消したことなど、当時のことがざあっと頭に広がっていった。書いたのは小学三年生の夏休み。

　ここには、“ゆうこちゃんだいきらい”と書いたのだ。

　八月十日。掃除機とクーラーがそれぞれ熱気と冷気を吐き出し、首振りの扇風機が一定の間隔でバキ、と音を立てている。当時小学三年生の俺は居間のテーブルに父親が使わないといってくれたシックな黄緑色の大学ノートを広げて、バトル鉛筆をぐりぐりと罫線の上に押しつけていた。頭を抱えて絞り出した一週間前の日付と出来事を表した鉛が手汗でにじむ。
　隣の席に置いた透明なビニールバッグにはボタン付きのキャラクターバスタオル、「おがさわらけい」と油性ペンで書かれた緑の水泳帽、水着が入っている。その持ち手が、扇風機がこちらを向く度にゆらゆらと揺れて、数日前のことを必死に辿る筆を鈍らせた。

　途端、ピンポーン、とインターホンが鳴る。掃除機が静かになった。
「ほら、祐子ちゃん来た。」
受話器を取る母をじっと見つめる。
「わざわざありがとねえ。」
母は明るい声で挨拶をした。祐子が来たのだ。母がこちらに振り返る前に、俺は
「おわった！」
と大きな声を出して勢いよくノートを閉じた。コーラのにおいの消しゴムが転がる。プールかばんをひっつかんで、俺はスリッパをテーブルの下に残したままエントランスに走った。

　毎年夏休みには、市民プールで小学生対象の水泳教室が開かれていた。俺は毎年、同じ町内の田島祐子と約束して一緒に参加していた。祐子は３個上で六年生だが、母親が同い年で、二人で子供会の役員をやっていたことがあったので親しく、俺たちもそれに付き合って遊んでいるうちに仲が良くなったのだった。

　階段をかけ下りてひんやりした灰色のタイルのエントランスに出ると、オートロックの重い扉ごしに、祐子の母親と、その後ろに祐子がそれぞれの自転車に跨っているのが見えた。祐子の背は毎年よく伸びて、すらりとして160cm近くあり、小さかった俺は羨ましかった。祐子は肩まで伸びた髪を一つに束ねて、鮮やかな朱色のTシャツとジーンズを穿いていた。大抵いつも膝上のスカート姿の祐子がズボンを穿いているのは珍しく、そのせいかいつもと違って見えた。すると、祐子がこちらに気づいてガラスの扉越しに目があった。俺はにっと自然と笑ったが、祐子はすぐ目を逸らしてしまった。
ちょっとむっとしつつ、五日ぶりぐらいの眩しいほどに晴れた空にどきどきしながら扉を押し開けると、熱気と蝉の鳴き声がどかっとなだれ込んできた。

「啓ちゃん。こんにちは」
祐子の母親はつばの長い帽子を深く被っていた。
「こんにちは」

答えると、祐子の母親はミニタオルで鼻を押さえながら、
「あっついね。アイスティー日よりだわ」
と言って、
「由美さんはまだ準備中？」
と笑った。
　由美というのは俺の母親の名前だ。俺はこくりと頷いた。これは奢ってもらわなきゃだね、とにこにこしている。水泳教室が始まる前に近くのファミレスで昼ご飯を食べる約束をしていたのだ。多分、俺たちを見送った後にも二人でお茶をする予定なんだろう。

　俺は妙に静かな祐子の方を見た。ちょっと俯いて、自転車のかごの辺りをぼうっと見つめている。かごの中は空っぽだった。祐子は初めて見る黒いポシェットを肩に掛けていたが、荷物はそれしか持っていない。俺はあっと声を上げた。
「おばさん！ゆうこちゃんプールの用意忘れてる！」
祐子は俺の大きな声に青ざめたような顔を上げた。母親は、ああ、と言葉を濁す。
「祐子はね、今日水泳お休みするんだ」
俺は再び俯いてしまった祐子を見、
「ゆうこちゃん風邪なの？」
と問いかけた。祐子は目を合わせないようにふるふると首を振った。
「お腹こわしたの？病気？」
「違う」
ハンドルをぎゅっと握りながら口ごもったのは細い声だった。
「じゃあ何で？」
唇を噛んでいる顔を真っ直ぐ見つめる。こめかみを伝った汗が赤いシャツにぽたりと落ちて染みになった。ゆったりと雲が流れて日陰をつくっていく。
「あのね啓ちゃん、」
祐子の母親が迷いながら口を開くと、背中側に涼しい空気が流れた。俺の母だった。
つば広の帽子をしっかりと被り、
「ごめんなさい遅くなって」
と言ってエントランスから外へ出てきたのだ。俺は答えを求めるように、すぐさま
「ゆうこちゃん今日休むんだって」
と報告した。母はあら、と言って、背中を丸めた祐子と、苦笑いした祐子の母親の顔を見比べた。母が瞬くと、祐子の母親はちょっと嬉しそうに
「ついに来ちゃったのよね」
と笑ってみせた。少し間を置いて、母は、ああ！とぱっと表情を明るくさせた。
「そうなの！おめでとう！」
祐子はやっと顔を上げた。
「祐子ちゃんきれいになったもんねえ。これからが楽しみじゃない。」
「どうかな、パパに似ないといいんだけど」

祐子は母親たちの方を向き、照れくさそうに、でも背筋をのばして二人の会話を聞いていた。俺は三人の顔を順番に見ながら水泳かばんをぶら下げていた。二人とも、そして佑子も、何をそんなに喜んでいるのか。雲が移動していく。
太陽は俺の頭だけをじりじりと焼いた。
「ママ、なに？」
はしゃいでいる母親に聞いても祐子が一瞬ちらりとこちらを見ただけで、答えてくれない。
「ママ！」
俺は手に提げたかばんを揺らして母の脚にぶつけた。母はやっと笑いながらうん？と振り返った
。
「なに！」
イライラしながら再び声を上げると、母は祐子とその母親に目配せしてから苦笑した。「祐子ちゃんね、今日ちょっと体調悪いから休むって。」

　それから、早くも子供の中学校入学についていつまでもお喋りしている親達の横で、俺は退屈なアフターランチタイムを過ごした。正面に座る佑子はナイフとフォークを上手く使ってハンバーグをちまちまと口に運んでいた。俺は物騒な効果音を口にしながら、ぐしゃっと縮めたストローの袋に水滴を垂らして、それが水を含んで伸びるのを剣の形のつまようじでつついて遊んだ。
　本当なら、癇癪を起してプールバッグをぶんぶん振り回しながら、一人で市民プールまで走って行きたかった。「ゆうこちゃんのうらぎりもの！」とかでかい声で叫んで、面倒なことに佑子が泣き出すのでもいいと思ったけど、できなかった。
　皿の上のコーンを全部食べ終えて、佑子はナイフとフォークを揃えて置いた。
「中学にはね、水泳部があるんだって。」
佑子は自分のストローの袋を差し出しながら言った。
「啓ちゃんも入学したら入りなよ。きっと楽しいよ。」
俺はストローの端を噛みながら、細長い袋を受け取って小さくうなずいた。

　結局「お祝い」ということで俺の母親がまとめて会計を済ませたのち、裕子は自転車に乗って家へ帰った。俺も防ぎようもない日差しを浴びつつ自転車で母親のすぐ後ろに付いて走った。
　ようやく塩素のにおいのする更衣室に入ると、大勢の人でごった返していた。ここの更衣室はあまり好きじゃなかった。狭いし、プラスチックでできた赤いスノコの上によく見ると長い髪の毛が落ちていたりする。
　腹の出た人の隣でロッカーを開け、鞄から紺の水着を取り出すと、右手にいた５歳くらいの男の子と目が合った。膝をついた母親にバスタオルでがしがしと頭を拭かれながら、丸い目をきょろきょろさせている。俺はロッカーの鞄の中にパンツを押し込んで、水着に足を通した。

　この日記を書いたのは、その日、耳に水が入ったまま夕方に帰宅して、すぐだった。家に帰るなり宿題をし始めた娘に母は驚いたに違いない。
結局ゆっくり一言“だいきらい”と書いた後、鉛筆を持ったまま胸に陣取ったわだかまりに悩んで、やっぱりもやもやしながら塗りつぶしてしまったけれど。
　佑子が中学に入ってからは、徐々に会う機会が減っていき、今となっては母を通じて偶然スーパーで会っただの、どこどこに就職するらしいだのと聞くぐらいだ。

　懐かしむという感覚を覚えてきた自分に苦笑しながら、小箱の積まれた勉強机に腰かけていると、記憶の中より痩せた母が
「昼ご飯外に食べに行く？」
と聞きながら部屋へ入ってきた。戸棚の中の物を床に並べてあるのを見、わざとらしく眉をひそめるので、苦笑いした。
「懐かしい物が見つかってさ。年を感じるよね」
「何を言ってるの、十九の娘さんが」
俺はノートを閉じて棚の奥に戻し、外行きの茜色のシャツを取り出して被った。
　今日も暑くなりそうだ。指の腹にうつった黒い文字の跡を、既に少し汗ばんでいる手で擦って消した。

おわり

奥付

夏の日記

http://p.booklog.jp/book/23129

著者 : なりまわたる
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/shatto1017/profile

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/23129

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/23129